

# ともに歩む教会、ともに歩むカトリック園

— 日本カトリック幼保連盟 2023年度 理事長・園長研修会—

小西広志（フランシスコ会 東京教区シノドス担当者）

2023年11月22日

## はじめに

日本カトリック幼保連盟 2023年度 理事長・園長研修会に参加されている皆さん、こんにちは。東京教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は少しお時間をいただいて「ともに歩む教会、ともに歩むカトリック園」と題して、皆さんと一緒に現在カトリック教会が目指している「シノドスの教会」の視点からカトリック教会の幼稚園、保育園のあり方について考えてみたいと思います。全体は2つの大きなテーマでお話をします。1つは「ともに歩む教会」についてです。これは2021年10月よりシノドス 世界代表司教会議 第16回通常総会が始まりました。各地域、各大陸での討議を終えて、先月、ローマで1ヶ月間にわたる第1会期の討議が繰り広げられました。来年の10月には第2会期も予定されています。「ともに歩む教会」はカトリック教会が目指している教会の姿です。この点について最初にお話をします。2つ目のテーマは、この「ともに歩む教会」の視点から、それではカトリック園はどのようになっていったらよいのかをお話させていただきます。わたしは幼児の保育と教育については全くの部外者です。もしかしたら的外れなお話になるかもしれませんが、しかし、わたしたちのカトリック教会が目指している「ともに歩む」姿は、当然、皆さんのカトリック園にも関係すると考えております。わたしの話をお聞きになって、園の運営のヒントのようなものをご提供いただけたらありがたいです。



Figure 1: Synod 2021 2024

# 1 ともに歩む教会のために

## 1.1 教会は歩む

教皇フランシスコは、シノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会を2021年10月9日に招集しました。「ともに歩む教会のために：交わり、参加、宣教」がテーマとして掲げられています。そして、各教区で、各国の司教協議会で、さらには大陸ごとにシノドスに向けての取り組みがなされました。今年の2月にはタイのバンコクでアジア大陸のシノドス会議が開催されました。そして、先ほども申し上げましたように先月、1ヶ月間におよぶ第1会期がローマで開催されました。日本からは東京教区の菊地功大司教さまが参加されましたし、2名ほどスタッフとして女性の方々が参加しました。来年には第2会期が開催される予定です。

「ともに歩む教会のために」(*For a synodal Church*)という表現は耳に新しいものです。また「シノドス的」(*synodal*)の名詞である「シノドス性」(*synodality*)についてはまったく新しい単語のように思えます。教皇さまが「シノドス性」について明確に発言したのは2015年10月17日の世界代表司教会議設立50周年記念式典でのことでした<sup>1</sup>。それを受けて「シノドス性」については教皇庁国際神学委員会が研究を重ね2018年に『教会のいのちとミッションにおけるシノドス性』(2018年3月2日)<sup>2</sup>という文書を発表しています。

「シノドス性」という教会の特性は聖書の記述に起因します。そして、初代教会の中で実践されてきました。古代教会の教父は「教会とシノドスは同義語である」と主張するほどにシノドス的な教会は実践されていました。また、第二バチカン公会議が示す教会の像に「シノドス性」は含まれていたのです。しかし、あえて21世紀になって、「ともに歩む教会」について理解を深めなければならないのには理由があります。と言うのも、今、教会は改革が求められているからです<sup>3</sup>。

ところで、「ともに歩む」教会について知るためには、あらかじめわたしたちが理解しておかなければならないことがらがあります。それは、キリスト教の信仰とは「歩み」だということです。信仰は「悟り」ではなく、「生きる」ことです。しかも、神さまの方へと向かって「生きる」ことです。ですから、信仰は「歩み」なのです。人は父である神さまからの愛の恵みの中で、両親を通じてこの世に生まれました。そして、人は神さまからいただいたいのを精一杯生きて、最後は父である神さまのふところへと帰っていきます。つまり、人は旅人なのです。それも「父から出発して、父へと帰っていく」旅人なのです。

このキリスト教信仰を伝える教会もこの世にあっては「歩み」ます。もちろん、組織や機構としての側面も教会にはあります。ですが、「歩む」という働的（ダイナミック）な姿が教会にはあるのです。教

<sup>1</sup>教皇フランシスコ、カトリック中央協議会訳、「世界代表司教会議設立50周年記念式典における演説」、2015年10月17日 参照。

<sup>2</sup>Commissione teologica internazionale, *La sinodalità nella vita e nella missione della Chiesa*, 2018 参照。

<sup>3</sup>教会の改革の観点から「シノドス性」についての論考は、拙著、「シノドス性 教会改革の視点から」、『日本カトリック神学会誌』第34号、2023、p.77-94、参照のこと。

会は人々を父のもとへと導くために「歩み」を止めることはありません。この「歩み」の道筋の中で、教会はその時代、その土地にあった形に柔軟に変わっていきます。それは、多くの人々が教会とともに歩めるようになるためなのです。

この前提に立って、教会の「シノドス性」について、また「シノドス的」教会について理解を深めていきたいものです。「シノドス性」という言葉は確かに聞き慣れない表現です。これは日本人に限ったことではありません。世界中の人々にとって「シノドス性」は始めて聞くようなものでした。日本語の翻訳も定着していません。ただ、カトリック中央協議会は「シノドス的教会のために」という標語を「ともに歩む教会のために」と訳しました。これは素晴らしいと思います。と言いますのも、シノドスという言葉はギリシア語に由来して、「ともに」を表す「シン (Syn)」と「道」を表す「オドス (Odos)」から成り立っているからです。ですから、「シノドス的」教会とは、まさにこの世にあって「ともに歩む」教会の姿を表しているのです。

## 1.2 教皇さまの言葉

「シノドス性」についての理解の深まりに重要な役割を果たしているのは間違いなくフランシスコ教皇さまです。ここでは発言、文書を手がかりに教皇さまが思い描いている「シノドス性」と「シノドス的」教会について簡単に見てみましょう。

**信頼の旅路** 2013年3月13日に就任以来、教皇さまが目指してきたのは教会の改革でした。信徒と聖職者が「ともに歩む」教会の実現を教皇さまは考えておられました。すでに教皇選出直後になされた演説であるウルビ・エト・オルビ *Urbi et Orbi* では次のように呼びかけられました。

今、わたしたち司教と民はこの旅路を歩み始めます。すなわち、愛において全教会を主宰するローマ教会の旅路を歩み始めます。それは兄弟愛と愛とわたしたち相互の信頼の旅路です<sup>4</sup>

また、教皇選出後の枢機卿団とのミサの中で「歩むこと」を繰り返し強調しています<sup>5</sup>。

**教える教会、教わる教会** 前述の通り、「シノドス性」という表現が教皇さまの口から出たのが2015年10月17日の演説においてです。特に「信仰の感覚」と結びつけて教会を理解する教皇さまの発言を引用してみます。

信徒にも、主が教会に示される新たな道を嗅ぎわせる「嗅覚」があるのですから、「信仰の感覚」の視点からは、教える教会 (*Ecclesia docens*) と教わる教会 (*Ecclesia discens*) を厳密に分けることはできません<sup>6</sup>。

<sup>4</sup>教皇フランシスコの最初の祝福、カトリック中央協議会訳、2013。

<sup>5</sup>教皇フランシスコの最初の説教、中央協議会訳、2013、参照。

<sup>6</sup>教皇フランシスコ、カトリック中央協議会訳、「世界代表司教会議設立50周年記念式典における演説」、2015年10月17日。

いつの間にか教会の中には2つの階層のようなものが生まれていました。神さまのことや教会の掟や教えを「教えてあげる教会」と、それを黙って「教わる教会」です。前者に属しているのは聖職者であり修道者でした。一般信徒は後者です。そして、一般信徒は一方的に教え込まれてました。「なぜ?、どうして?」と反論してはならなかったのです。教える側の聖職者と修道者にはプライドがありました。しかし、キリスト信者は洗礼の秘跡によって「信仰の感覚」を戴いていますので、誰もが信仰の理解を深めることはできます。ましてや信仰を生きることは一般信徒の方が優れているかもしれません。

**低くする教会** 『教会のいのちとミッションにおけるシノドス性』でも引用された聖ヨハネ・クリゾストモの言葉を用いながら、教皇さまは「教会とシノドスは同義語である」ことへの理解を深めるべきであると主張しています。そして、

教会は、神の民が主キリストに向かう歴史の旅路を「共に歩む」ことに他ならないのですから、その中では、誰も他の人の「上に」立つことなどできないということも理解できます。むしろ教会の中では、旅路において兄弟姉妹に仕えるため、人は自らを「低く」する必要があるのです<sup>7</sup>。

と指摘します。神の民に与えられた「信仰の感覚」のおかげで、教会はこの地上にあって歩み続けることができるのです。このように「信仰の感覚」は「シノドス性」の中核をなす原理となります。洗礼と聖霊の塗油のおかげで、主イエス・キリストに結ばれた信者は、教会の一員として真理を見分ける「信仰の感覚」をたまものとして父なる神から聖霊を通していただきました。この「信仰の感覚」こそが、御父の方へと共に歩いていく神の民にとっての共通の基盤となります。

**聞く教会** 「シノドス性」をさらに際立たせて、現代社会の中でキリストの福音を証しするためには、どうしても欠かせないものがあります。それは「聞く」ことです。すでに昨年の開会の説教の中でも教皇さまはシノドスの歩みをする上で「参加する」、「聞く」、「識別する」の三つの動詞が欠かせないと指摘しています。

特に「聞く」については積極的な取り組みがなされていないようにも思いますが、教皇庁シノドス事務局は2022年の初め頃より「聞く教会」(*the listening Church*)をアピールしています。信者が互いに相手の言葉に耳を傾けることは「シノドス性」の具体的な姿となります。



Figure 2: 耳を傾ける教皇

<sup>7</sup>同上。

2014年の家庭に関する特別シノドス、翌年の家庭の召命とミッションに関する通常総会の二つのシノドス世界代表司教会議の体験は、意見の対立の中にあっても一致点を捜していくためには「聞く」ことが必要であることに気づかせてくれました。そして、よりよく「聞く」ためには分かち合いのような小グループによる「集い」が有効だと気づかせてくれたと思います。

**分かち合う教会** 教皇庁シノドス事務局は、2021年に『準備文書』を発表しました。そこには10の設問が記載されており、各教区で回答するようにとの指示がありました。『作業文書』のおかげで「シノドス的」教会の姿がなんとなく分かってきました。3つの点が大切であると気づかされたのです。それは、共同責任、共同識別、そして人格の成熟です。ここでは詳しいことには立ち入りません。「ともに歩む教会」はあることについて「ともに責任を担う」教会です。そして、よりよい教会となるために「ともに識別する」教会です。こうして、そこに集った人々はキリストの背丈にまで「成熟する教会」なのです。

共同で識別するためには自分の意見や考え、思惑に凝り固まっていたはダメです。周囲の人を信頼して、自分の意見を語り、相手の意見に素直に耳を傾けなければなりません。ですから、共同識別のためには「分かち合い」が大変効果的になるのです。

### 1.3 「シノドスの教会」はすでに始まっている

以上が、「シノドス的」な教会、すなわち「ともに歩む教会」の全体像です。特に聞くこと、対話を通じてなされる「分かち合い」は、カトリック教会の新しい姿だと言えるでしょう。信徒も、修道者も、聖職者も、男性も、女性も、年配者も、若者も、誰もが等しく教会の主人公であり、歩み続ける教会の大切なメンバーなのです。誰も排除されてはなりませんし、むしろ、多くの人々を「歩み」の中へと招き入れる必要があるでしょう。

こういった「ともに歩む教会」は突然と生まれるものではありません。もう「すでに」始まっているのです。しかし、「未だ」完成してはいません。ですから、教会は自分たちの至らないところを素直に認め、改めるべきところは改めなければならないのです。

## 2 ともに歩むカトリック園のために

お話の前半では「ともに歩む教会」についてあつかいました。後半では、カトリック教会のもとにある幼稚園、認定こども園、保育園など幼児の教育ならびに保育施設について具体的なあり方を「シノドス的な教会」に則して考えてみましょう。発表者は幼児教育の専門家ではありませんから、あくまでも部外者から見た視点からお話しします。何かの参考にしていただけたら幸いです。

### 2.1 どこから来て、どこにいて、どこへと向かうのか

現実のカトリック園について考察するために、「どこから来て、どこにいて、どこへと向かうのか」という3つの点から考えてみたいと思います。「わたしたちの、あるいは、みなさんのカトリック園はどこから来たのでしょうか。これまでどのような歩みをしてきたのでしょうか」。これが第1の問いかけです。この問いかけは、起源や根本に立ち返るためには必要なものです。そして、過去の歩みを俯瞰してみると、実はすでに「ともに歩む」カトリック園であったことに気づくと思います。この気づきは大切です。今まで歩んできた。という気づきと自覚は、未来への第一歩となるからです。

続いて、第2の問いかけは、「今、わたしたちは、あるいは、みなさんのカトリック園はどこにいますのでしょうか」、というものです。つまり、現状の認識です。これまでの歩みを振り返ると、神さまがともにいてくださり、自分たちのカトリック園を祝福し、導いてくださったことに気がつくでしょう。そうしたら、今、自分たちがおかれている現実を深く知ること、やはり神さまがともにいてくださることに気がつくでしょうし、そのことをみんなで喜び合うことはできるでしょう。現状は厳しいのは確かですが、それでも、「めぐみ」はあるのです。隠されているのです。

最後の問いかけは、「神さまはわたしたちをどこへと導こうとしているのか」というものです。これはわたしたちに、あるいはみなさんに祈る心と希望を与えたいと思います。

以上、「どこから来て、どこにいて、どこへと向かうのか」という点から、「ともに歩む」カトリック園について考えてみましょう。最初に申し上げましたように、発表者は門外漢ですから、少し的外れなものになるかもしれません。あるいは、気分を害するものになるかもしれません。その点は、ご了承ください。

#### 2.1.1 これまでの歩み

さて、ずっとさかのぼって16世紀の切支丹時代の教育事業と児童福祉施設についてお話ししたいと思います。日本にキリスト教を伝えたのは聖フランシスコ・ザビエルです（1549年）。ザビエルはイエズス会という修道会のメンバーでした。イエズス会の基本方針は世界各地での宣教（キリスト教を広めること）であり、そのために青少年の教育、子どもたちへの教育にも力を注ぎました。日本ではセミナリヨ、コレジョと呼ばれる中等教育以上の教育施設と初等学校が設立されました。初等学校に通った幼児、児

童たちはつぎのようなことを学び、宣教師たちに影響を与えています。

1. オルガン、ハープ、ビオラなどの楽器を使った演奏。楽器にあわせて子どもたちは聖歌を歌った。西洋音楽が日本に始めて導入された。
2. イソップの寓話が導入され、子どもたちは喜んで耳を傾けた。
3. 宣教師たちは、熱心に祈る幼児たちの祈りや歌から慰めと励ましを受けた<sup>8</sup>。

同じ頃、豊後大分では乳児への保育として育児院が設立されました。

その後、2世紀に及ぶ鎖国を経て、開国し、明治時代が始まります。1873年に切支丹禁制の高札が撤去され、キリスト教の宣教が活発となりました。すでに1872年に幼きイエス会（サン・モール）によって横浜で孤児、捨て子、困窮者の子どもたちの養育が行われました。1875年からは築地の外国人居留地で孤児の養育の施設が開設されます。しかし、1887年（明治20年）以降、女子修道会は孤児救済事業から女子教育事業へと活動を転換しています。20世紀に入っていくつかの女子修道会による幼稚園が設立されます。1904年にはシャルトル聖パウロ修道女会によって白百合学園附属幼稚園が創立されました。幼きイエス会は雙葉学園に小学校と幼稚園を創設しています（1910年）。その後は各地に幼稚園などの児童施設ができました。あるときには町の教会（小教区）に付属する形で、またあるときには修道会が設立母体となってカトリック園は生まれていったのです。幼児教育が行き届かない第二次世界大戦前にはカトリック園の果たした役割は大きいと思います。

また、日本の植民地政策に対応して来日した教育修道会もありました。ある修道会は日本の軍政下にあったミクロネシアでの宣教のために来日し、学校を設立しました。こうして、相当数のカトリック・ミッション校、ミッション園が国内に生まれていったのです。

第二次世界大戦後、カトリック教会は各地に幼稚園を含む児童施設を設置しました。戦後の混乱期における戦災孤児への関わりが必要でしたし、また、復興のために幼児教育が必要不可欠だったからです。1955年（昭和30年）以降に設立されたカトリック学校、カトリック園は多いです。一つの要因として人口の急速な増加があげられるでしょう。また、教会内部の事情として1949年の中華人民共和国の成立の結果、中国本土で働く宣教師やシスターたちがそこから追い出され、次の宣教の場所を求めて日本に上陸したという事情もあるでしょう。

カトリック園は増えていきました。しかし、その設立の目的が明確でないという点も指摘できるかもしれません。日本のカトリック教会にとって幼稚園、保育園等は宣教の手段でした。事実、子どもを園に通わせることを通じて、神さまを知り、教会を体験し、洗礼へと導かれた保護者は多かったと思

---

<sup>8</sup>小林恵子、「日本におけるキリスト教主義保育の設立と展開」、『幼児教育史研究』、第14号、2019、p.36 参照。

ます。しかし、幼稚園であれ保育園であれ、その主たる目的は子どもの養育と教育にあります。この点については当時の関係者は無関心とまではいかないものの、専門家としての意識は低かったのではないのでしょうか。前述の通り、切支丹時代の初等教育と幼児教育は望郷の念にかられた孤独な宣教師たちに慰めを与えました。同じような心情（メンタリティー）は未だに残っているかもしれません。

カトリック教会を大きく変える出来事が生じたのは1965年に閉会した第2バチカン公会議以降でした。それまでの荘厳で、しかも西洋的な雰囲気（バタ臭い）のする教会から、その地の文化に根ざした教会へと変貌してきました。この時期にカトリック園として注目しなければならないのはモンテッソーリ教育の導入でしょう。1967年に上智大学の研究者たちが中心になって日本モンテッソーリ協会が結成され、教員の養成コースが開講されました。カトリック園ではモンテッソーリ教育を導入するところが多くなりました。現場の職員たちも養成コースに参加しました。その際に、カトリック園の多くの管理者たちも養成コースに参加し、ともに学んだのは貴重な体験だったと思います。カトリック園にとってモンテッソーリ教育そのものが教育の基本的な枠組みとなり、特色となっていきました<sup>9</sup>。

21世紀を迎えて、日本の社会の少子化と高齢化に伴って、幼稚園と保育園のあり方は変わりつつあります。また、国の施策も目まぐるしく変わりました。そのような状況でカトリック園は、自らの存在意義を問い続けていると言えるでしょう。

### 2.1.2 今おかれている現状

この四半世紀で日本の社会は大きく変化しました。幼児保育、幼児教育についても同様です。カトリック園は今までにない厳しい状況におかれているのかもしれません。発表者はカトリック園とは縁もゆかりもない部外者ですが、カトリック教会の司祭の視点から、現在カトリック園が直面している状況（チャレンジ）について箇条書きであげてみます。

#### 園の運営について

**設立の目的、運営の理念** 幼児教育ならびに保育に携わるカトリック園にとって「なぜ、自分たちの園があるのか」という理念がゆらいでいるのかもしれません。カトリック園で理念として「聖母マリア」というキーワードが筆頭にあるという調査報告がなされています<sup>10</sup>。確かにカトリック教会の信仰によって聖母マリアは導き手であり、守り手です。同時に聖母マリアの生き方は人間の生き方の一つの模範となります。この信仰における真実を日々の保育のなかでどのように具現化していくかが問われるでしょ

<sup>9</sup>鈴木康広、吉田直哉、安部高太朗、「カトリック系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色 ―日本カトリック幼児教育連盟の横浜教区（神奈川・山梨・長野・静岡）に着目して―、『敬心・研究ジャーナル』、第3巻第1号、2019、p.115-123 参照。

<sup>10</sup>上掲書 参照。



う。さらに、前述の通り、カトリック園が宣教の手だてなのか、それとも人間教育の手だてなのかという点が明確になっている園は少ないかと思えます。

**法令遵守（コンプライアンス）の意識** この10数年、企業であれ、公的機関であれ、法令遵守（コンプライアンス）は必須の課題となっています。かつてのように地域の子どもたちを集め自由に教育、保育をすることはもはやできません。法令を守るだけでなく、倫理観、公序良俗などの社会的な規範に従い、公正かつ公平に業務を行うことが求められています。さらには法令遵守の姿勢を対外的に示さなければなりません。

**人権の意識** わが国は先進諸国の中でも人権についての意識が極めて低いと言われていています。多発するハラスメントの事案はその表れと言えるでしょう。さらには性別の格差も大きく、特に女性が社会的に不利な立場に追いこまれるのが現状です。また、人種と言語、文化の違いを乗り越えるような取り組みが必要です。カトリック園にあっては、もちろん利用者である幼児の人権が守られなければなりませんし、職員の人権も守られなければなりません。職員に関しては労働条件ならびに環境の整備は必須と言えるでしょう。さらに注意しなければならないのは利用者の保護者たちの人権も守られなければなりません。

**キリスト教信仰に基づくビジョン** カトリック園の運営に教会の信者が携わることが少なくなりました。いろいろなご縁があって、信者ではないものの理事長、園長などの管理職に就かれる方が増えました。例えば、かつては司祭やシスターなどが管理職にいましたので他者からもカトリック教会の幼稚園、保育園と認知されやすかったわけですが、現在はそれは難しくなります。しかし、その一方でカトリック教会の信徒ではないけれども、運営の理念にこころを打たれて、理想を実現しようと尽くしてくださる方々が多くいるのはとても有り難いことだと思います。いっしょに歩んでいきましょうという姿勢は設置者であるカトリック教会側に求められるでしょう。

**職員の確保** 少子化が進む中で、若い人の労働人口が減りつつあります。幼保にあえて職場を見いだそうとする人々は減っているでしょう。今、人材の確保と育成は必要だと思われます。

**財源の問題** 宗教法人立の幼稚園はずいぶんと減りました。ほぼ学校法人立の幼稚園となっていると思います。しかし、学法の財源の確保は難しいでしょう。保育園も同様だと考えられます。どのカトリック園も同時期に創立されていますので、建物の老朽化とその改善という重い課題も背負います。また、どんな子どもでも安全に園での生活を過ごしてもらうためにはユニバーサルデザインの導入も必要となります。それは建物の躯体にまで及ぶ案件でしょう。こういった事案のために財源を法人（学校法人であれ社会福祉法人）は確保することが求められます。認定こども園化への移行は、財源にゆとりを

もたらずかもしれません。しかし、行政の指導もそれだけ厳しくなり、カトリック園としての独自性をどれだけ保てるかは難しくなるでしょう。

## 保育の現場で

**職員の育成** 職員との意思疎通の難しさはどの管理者も痛感していると思います。さらに、新卒の職員を育成する必要性もあるでしょうし、主任となるような経験者を育てる必要があるでしょう。その点で、教会の奉仕者である司祭やシスターらが本当に職員養成に取り組んでいるかは疑問が残ります。前述の通り、かつてはモンテッソーリ教育のためにともに学ぶことができたのに、司祭やシスターたちの高齢化のおかげで意欲がなくなっているのが現状ではないでしょうか。

**チームワークを育む** ともに考え、ともに責任を担い、ともに実行していく。これがカトリック教会が目指している「シノドスの教会」の姿です。そのためにはチームワークは不可欠です。チームワークの輪の中に保護者や地域の方々も含まれていくでしょう。しかし、2000年代移行の費用対効果を求めていくような社会の風潮にあって、子どもたちの保育をめぐるチームワークづくりは難しさがあるように思います。

**保護者との関わり** 家族や家庭の状況が大きく変化しつつある現代にあって、お子さんをお預かりしている園に向けられた人々の視線は厳しいものがあります。また、多種多様な家族の現実がある中で、家族の成員間の愛の関わりをカトリック園が示していく必要性はあるでしょう。政権与党が考える憲法修正案には家庭への過大な責任を負わせようとする考えが見え隠れします。家庭を将来の労働力提供の苗床にしようとしています。今まで以上に家族、家庭を取り巻く環境は難しいものとなると予想されます。そんな中で、カトリック園が愛の大切さを訴え続ける役目を担っているでしょう。

以上、発表者が考えるカトリック園が直面する現状を列挙しました。これ以外にも大きな課題やチャレンジがあると思います。

「どこから来たのか」という問いかけでこれまでの歩みを振り返ると、そこには神さまの不思議な導きがあったことに気づくはずです。「今どこにいるのか」という問いかけで現状の厳しさに押しつぶされそうになりながらも、それでも神さまは助けてくれると信じるならば、「どこに行くのか」という新しい道筋も見えてくるのではないのでしょうか。カトリック園は、どの園も神さまの見守りと、マリアさまの導きの中にあるのです。

### 2.1.3 どこへ向かうのか

それでは、カトリック園はどこへと向かうのでしょうか。今日の講演の最初の方で申し上げましたが、教会は歩みます。ですから、教会のもとにあるカトリック園もまた歩いていきます。これまでの歩みを振り返り、今の歩みをしっかりと受けとめて、それでは神さまはわたしたちをどこへと向かわせてくれるのだろうかと考えるのが大切だと思います。教会の信仰の言葉で言い換えると、「聖霊はわたしたちをどこへと導くのか？」という問いかけになります。このことを祈りの中で知る、職員さんたちとともに探っていくことが「共同識別」なのです。

いくつかの向かう道筋が見えてきました。第1に「わたしからわたしたちへ」という意識の変革です。第2に「祝福」です。第3に「セレブレーション」、そして第4に「宣教としてのケア」、この4つです。一つひとつを順に見ていきましょう。

**わたしからわたしたちへ** この25年、社会は個人主義的なあり方を強めています。すべてのことは個人に課せられます。「わたし」がすべてを決める基準となりました。しかし、そのような個人主義は脆いのです。なぜなら「わたし」とは力あり、何でもできる「わたし」ではないからです。弱々しく、力ない「わたし」が真の「わたし」のはずです。だからこそ、人は助け合って生きます。支え合って生きます。こうして「わたしたち」という意識が生まれていきます。教会の信仰の言葉で語り直すと、人は「交わり」の中で生きるものです。「交わり」を通じていのちを豊かにしていきます。この「交わり」は共同体を生みます。人は共同体で生きるのです。

日常生活の中に「わたしたち」という一人称複数形の視点を持ちましょう。そして、その「わたしたち」とは、ともに歩む「わたしたち」なのです。しかも閉じて閉鎖的な「わたしたち」ではなくて、誰をも排除しない「わたしたち」です。

**余白をつくる** それぞれのカトリック園が「わたしたち」という共同体になるためにはどうしたらよいでしょう。それには「余白をつくる」ことです。「わたし」だけを生きる人は自分の考え、自分の思い、自分の意見でところが一杯です。他人の言葉に耳を傾けません。ギリギリで緊張しながら生きているからです。しかし、他人の声が、言葉がその人のところに入ったら、ところに余白が生まれます。他人の意見に耳を傾けることができます。「余白をつくる」のは言葉だけではありません。ジェスチャーもそうです。例えば朝、登園の際に交わすあいさつとジェスチャー、あるいは手と手をあわすタッチは、子どもにも職員にも「余白をつくる」きっかけとなります。家族という「わたしたち」の世界から、幼稚園あるいは保育園という少し広い「わたしたち」の世界へと移っていく体験は子どもたちを成長させるはずです。

**聞き合う** ところに余白が生まれたら、お互いに「聞き合う」必要があります。聞いてもらったという体験は安心を生みますし、「わたしたち」という意識が芽生えるきっかけとなるでしょう。現代は聞くことの不全があると主張したのは臨床心理士の東畑開人さんでした<sup>11</sup>。確かにたくさんある声の中から聞き分けるのは難しいです。誰もが聞いてほしいと願っています。管理者が職員に聞く。職員が子どもたちに聞く。園全体が保護者に聞く。といった「聞く」姿は「わたしたち」という雰囲気を作りあげていきます。

「教える教会」と「教わる教会」を乗り越えると最初に申し上げました。ともに歩む教会には上下の差はないのです。むしろ、上に立つ者ほど、身をかがめて聞かなくてはならないでしょう。保護者から教えてもらえるものはたくさんあります。職員から教えてもらえるものはたくさんあります。そして何よりも子どもたちから教えてもらえるものはいっぱいあるのです。

**分かち合う** 「聞き合う」ことができるようになったら、「分かち合う」ことも容易にできます。子ども同士が、職員同士が、互いに持っているものを相手に分かち合うのです。特に自分の意見や体験を分かち合うことは大切です。折り紙ができる子が、できない子に教えるのは技術（スキル）を伝えるためだけではないでしょう。できあがった時の喜びをいっしょに「分かち合う」ためです。福音書の中でイエスさまが語る父なる神さまは、いつも「いっしょに喜んでください」と呼びかけています。

**祝福する** もし、カトリック学校とカトリック園の特徴は何かとたずねられたら、発表者は「祝福する」ですと答えるでしょう。「祝福する」は、キリスト教信仰の真髄を表すものです。なぜなら、「祝福」には目の前の相手を認めること、そして、その相手のために祈ることが含まれているからです。

**認め合い、受け入れ合う** 互いに認め合う、受け入れ合うことは祝福の第一歩です。現代社会に欠けているのは認め、受け入れることです。他人を認める。そして他人を受け入れる。そのためには自分自身をしっかりと認める、ありのままの自分をしっかりと受け入れることが必要です。ですから、祝福は他者のためであり、自分自身のためなのです。カトリック園で働く若い職員さんたちにはこの点を体験してほしいと思います。自分自身を認め、受け入れ、祝福したときに、子どもたちを無条件で祝福できるようになるでしょう。発表者は結婚のために園を退職する職員さんたちに何回か出会ってきました。子どもたちは祝福の気持ちでいっぱいです。小さくて、ともすれば自分のことにしか関心が向かないような子どもたちでも、大切な先生のお祝いのために祝福の言葉とジェスチャーをするのです。

**祝福の言葉の数々** 日常生活の中にはたくさんの祝福の言葉があります。人の生活は祝福で満ちているのです。「おはようございます」、「いただきます」、「ごちそうさま」、「ありがとう」、「おめでとう」、

<sup>11</sup>東畑開人、「聞く技術、聞いてもらう技術」、ちくま新書、2022、参照。東畑氏は「聴く」より「聞く」の方が難しいとします。この指摘は驚きに値するものでしょう。

「いってきます」、「いってらっしゃい」、「ただいま」…etc. このような祝福の言葉に彩られて生きることは成り立っているのです。

しかしながら、実際の生活では禁止語が横行しています。禁止語は祝福の言葉とは真反対のものです。禁止語をかけられた人は、こころと身体が萎縮し、自由を失います。発表者は高校野球をあまり好みません。グラウンドには祝福の言葉が見当たらないからです。自由を感じないからです。同じように運動会も好みません。特に団体でのマスゲームを見るのが辛いです。個性と自由を失わされた子どもたちが無表情に行っているように見えてしまうからです。

祝福によって人の顔は輝きます。仏頂面で祝福する人はいないでしょう。苦虫をかみつぶしたような表情で祝福を受ける人はいないでしょう。そして、祝福はその人の潜在的（ポテンシャル）な力を引き出します。

**セレブレーション** 祝福を受ける喜びを体験した人は、祝福を受ける場面と場所を好むようになります。わたしたちが神社を訪れてホッとところにゆとりが生まれるのは、かつてそこで祝福を受けたという記憶があるからです。カトリック教会の教えに則して考えてみると祝福を受ける一番の場面と場所は「祝祭」（セレブレーション）です。つまり、祈りであり、ひいてはミサです。

**神さまへの祈り** カトリック園の特徴に日常の中に祈りを取り入れていることがあげられるでしょう。祈りを大切にしていきたいです。祈りの文言を覚えるのも大切です。しかし、もっと大切なのは祈りの姿勢です。手を合わせ、眼を閉じ、向こうから聞こえてくるかもしれない声に耳を傾ける姿勢です。

**食前と食後の祈り** 食前で食後の祈りは園ではよくやっておられると思いますが、厳しい言い方になりますが、あれは祈りではないです。ただ、習慣的に手を合わせているにしかすぎません。祝福の中で、祝福された食事を分かち合ってくださいことを食前の祈りでは願うのです。分かち合ってください食物をもたらしてくださった神さまに感謝し、自分たちがいただいた以上の祝福を、苦しむ人哀しむ人々に分けて差しあげてくださいと祈るのが食後の祈りです。形だけにこだわるような祈りの指導はあまりカトリック園にふさわしくないかもしれません。

**お帰りの時の祈り** 多くのカトリック園は退園時に祈っていると思います。職員と子どもと一緒に祈れる場面です。たくさんの祝福を今日いただいたことに感謝します。このように毎日のしめくくりを祈りで終わる体験をした子どもは、人生それ自体が「祝祭」（セレブレーション）であり、神さまから祝された人生を歩いていくことに気づくはずで

**マリアさまとともに祈る** 多くのカトリック園のお教室にはマリアさまの像があることでしょう。お教室のその一角は聖なる場所であることに気づいてもらうような関わりは大切だと考えます。何かうまくいったとき（例えば、お仕事が終わったとき）、逆に何かうまくいかないとき、折りに触れて、できれば頻繁に聖なる場所ではんのわずか手を合わせるような指導は必要ではないでしょうか。そのためには管理者と職員が普段から（朝礼や終礼などで）祈りの体験を積み重ねる必要があるでしょう。

**ミサ** 祝福を体験し、自分たちが過ごす園が祈りの場面と場所に満ちていると知った子どもたちは、自然とミサの中に入りやすいと思います。カトリック教会にとってミサは一番の「祝祭」（セレブレーション）の場面です。幼いうちから、聖堂が大切なところで、静かに過ごすことでより神さまからの祝福を感じるられるという体験はその人の人生を豊かにします。

発表者は、この夏、北海道の北見教会で素敵な場面に遭遇しました。留辺蘂（るべしべ）マリア幼稚園（学法北見カトリック学園）の子どもたちが教会を訪問しました。それは、JRの汽車に乗る訓練も兼ねていました。子どもたちは汽車に乗ったことがないのです。駅、JR、そして北見教会という社会資源を利用しながら、子どもたちは小さな巡礼の旅をしたのです。教会に到着した子どもたちはどの子も祝福に満ちた輝いた顔でした。聖堂でちょっとお祈りして、神父さまから祝福を戴いて、お弁当を食べて、また汽車に乗って帰って行きました。聖堂で騒ぐ子どもは一人もいませんでした。みんな喜んでいました。こういった教会を使っただけの小さな「聖なる」体験の先に、ミサがあるのだと思います。

**宣教としてのケア** 最後にカトリック園は「ケア」がよりよくなされる場であるということをお話します。「ケア」とは、最近よく聞かれる言葉です。「関わり」、「気づかい」、「配慮」、「寄り添う」などと言い換えてもよいでしょう。そして、多くの人々が「ケア」を生きます。子どもたちの保護者たちは、家庭で子どもたちを「ケア」します。場合によっては家族の別のメンバーをケアしなければなりません。カトリック園の管理者と職員は子どもたちを「ケア」します。しかし、実は子どもたちは周りの大人を「ケア」しています。つまり、「ケア」は人と人の「交わり」を表すものなのです。

そして、真の「ケア」は自分自身を一度「宙づり」の状態にしなければなりません。なぜなら、自分の意見、自分の思い、自分の体験に固執しては、真に相手に「寄り添う」ことはできないからです<sup>12</sup>。

「ケア」については一般的にもよく知られてきました。また、教皇フランシスコも「ケア」という表現をよく使っています。特に2020年以降のいわゆる新型コロナウイルス感染症が蔓延したパンデミックにあっては「ケア」についての発言は多かったです。

相手にために尽くす生き方はどの宗教も、どの信仰も目指しています。キリスト教の信仰にもとづ

---

<sup>12</sup>小川公代、「ケアの倫理とエンパワメント」、講談社、2021、参照。

いて「ケア」をとらえてみると、「ケア」のモデルは十字架にかけられた主イエス・キリストです。イエスの後に従って信仰の道とともに歩んだ聖母マリアもまた「ケア」のモデルとなります。一人の人間が「ケア」に専念すべく、すべてを「宙づり」にして生きる姿は、キリストの伝えてくださった「福音」を生きる姿と重なります。なぜなら、真に「ケア」を生きるためには神さまの助けを願わなくてはならないからです。カトリック園の管理者と職員が「ケア」に生きようと努める姿に、多くの人々は神さまの愛を見ることでしょう。そして、自分たちも「ケア」に生きてみたいと願うでしょう。保護者が子どもの養育のことで園の職員に相談を持ちかけるのは、「ケア」を生きているしるしとなるのです。

### 3 おわりに

少し分量が多かったですが、幼児教育の門外漢である司祭から見た、ともに歩むカトリック園の姿についてお伝えしました。何か、皆さまの参考になれば幸いです。

カトリック園は宣教のための直接的な手だてとはならないと思います。しかし、このような時代だからこそ、カトリック園は大切な社会資源となります。子どもたちの人権を守り、子どもたちの「分かち合う」ところを育み、自分だけの力に頼るのではなく神さまに「お祈り」をし、しかも「祝福」の言葉を周りの人々に与え尽くすような生き方をする子どもたちを育てることへとカトリック園は招かれているのではないのでしょうか。

小さな時の「交わり」の体験、「祝福」の体験、「聞く」ことのすばらしさの体験は、子どもたちとその保護者に「よいもの」を与えてくれるとわたしは信じています。子どもたちとともに歩む、保護者や地域とともに歩む、そして何よりも教会とともに歩むカトリック園を目指してまいりましょう。

ありがとうございました。